

『教育再生会議』の提言を読みましょう！

●—————→

今年1月に教育再生会議の第一次報告が出され、第2次提言は5月に出そうということで、その中に例えば道徳を教科にしようとか、先生たちの給料に幅を持たせて能力に応じて増減させようとか、人気校には予算優遇しようとか、そういうことを盛り込もうとしています。また、昨日の毎日新聞に出ていたのですが、第二次提言を出す前に、親学に関する緊急提言するといっています。そのポイントというのは、子守唄を聞かせ母乳で育児 授乳中はテレビをつけない。5歳から子どもにテレビ、ビデオを長時間見せない 早寝早起き 朝ごはんの励行 PTAに父親も参加。子どもと対話し教科書にも目を通す インターネットや携帯電話で有害サイトへの接続を制限する「フィルタリング」の実施 企業は授乳休憩で母親を守る 親子でテレビではなく演劇などの芸術を鑑賞 乳幼児健診などにあわせて自治体が「親学」講座を実施 遊び場確保に道路を一時開放 幼児段階で挨拶など基本の徳目、思春期前までに社会性を持つ徳目を習得させる 思春期からは自尊心が低下しないよう努める といった中身です。これがそのまま提言されるかどうかわかりませんが。

私は、最初 どうせ政府がやろうとしていることをアリバイ作りにやるような会議だととらえていたのですが、教育再生会議の提言という形を借りて、政府がやりたいと思う教育改革をどんどん出してきているなぁと思いました。そしてその提言にもとづいて教育施策が出されてきているので、たとえ中身のない会議であっても、どういう提言を出してくるかということをしっかりとして見ておかないといけないと考え、今日の例会のテーマとしました。

教育再生会議第一次報告

4つの緊急対応

- (1) 暴力など反社会的行動をとる子供に対する毅然たる指導のための法令等で出来ることの断行と、通知等の見直し(いじめ問題対応)【18年度中】
- (2) 教育職員免許法の改正(教員免許更新制導入)【平成19年通常国会に提出】
- (3) 地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正(教育委員会制度の抜本改革)【平成19年通常国会に提出】
- (4) 学校教育法の改正(学習指導要領の改訂及び学校の責任体制の確立のため)【平成19年通常国会に提出】

(1)のいじめについては、昨年11月に「いじめ問題の緊急提言」として出していますが、

(2)(3)(4)については今まさに国会で審議されています。

教員免許更新制というのは、10年に一度教員の免許を更新するために講習を受けなければならないという仕組み。

(3)は、地方の教育委員会に対して文科省が指導・助言ができるようにするとか、小さい市町村の教育委員会は統廃合できるとか、教育委員会のあり方を見直すもの。

(4)の学校教育法の改正は、昨年12月に改定された教育基本法に基づいて、学校教育法に定められている教育の目的のところを変えていくというもの。

こういった教育の根幹に関わる法律の改定が、今国会で行われようとしています。それもこの教育再生会議の提言を受けてという形で行われようとしています。

4月24日に行われた全国一斉学力・学習状況調査もこの第一次報告の中に盛り込まれています。こういった形で、学校の中でこの提言の中身がどんどん具体化されようとしています。

一番問題なのは、先生への締めつけだと思う

小学校3年生の子どもがいます。勉強不足なので、こういう会に出て勉強していきたいと思います。自分でしっかりと読み込んで、理解することができてから、いろんな人に声をかけていきたい。この報告を読んだ感想は、いろいろありますが、あまりよけいなお世話はしてほしくない。学校の先生は公務員なのに、これでは一般の会社員みたいな感じ。子どもと関わる先生には、そういうドロドロしたものはないほうがいい。きれいな気持ちで人に何かを教えるということができなくなってしまうのではないかな。結局自分の地位とか、お金とか、そういうことを考えてしまうのではないかな。純粋な気持ちで子どもたちに向き合ってほしいと思う。

私も一番問題なのは、先生への締めつけだと思う。先生が自分で考えて、子どもにとって何が一番よいかということを考えながら教育をしていくということが、これのできるのだろうか。教員になろうとする若い人が出てくるのか。

提言の中に「教育委員会は説明責任を果たしつつ、住民や議会による検証を受ける」とあるが、これができればいいとは思いますが、教育委員会や校長先生の権限が今以上にふくらんでいってしまうのは困る。

この項目は、昨年問題になったいじめ問題に対する教育委員会の対応や、未履修問題への姿勢、そういう背景で出てきたものではないかと思う。地方の教育委員会がちゃんとしていないから、そういうところには文科省が指導・助言という形で、国の影響力を強めようというものだと思う。

その一方で、「学校教職員の人事について、広域人事を担保する制度と合わせて、市町村教育委員会に人事権を極力、委譲する」とある。今、先生は県教委の採用ですが、それを例えば松戸市教委に権限を委譲するということ。お金があるところはいいですが、ないところは厳しいですね。このように地方分権を進めようという動きもある。その一方で小さい市町村の教育委員会は統廃合を進める。教育委員会のあり方についての項目



だけを見ても、中央集権化と地方分権化という相反する二つの側面がある。

「塾に頼らなくても学力がつく」(?!)



教育内容の改革のところは、学校教育の中身に直接関わるところですが、例えば、「ゆとり教育」を見直して学力を向上させるとあります。本当に学力が低下しているかどうか疑問だということもいろいろなところで言われていますし、たとえ学力が低下しているとしても、その原因が「ゆとり教育」にあるのかも疑問です。でも再生会議では、「ゆとり教育」が学力低下の原因として、それを解決するために授業時数を10%増やすとか、学力テストをやって学力の状況を把握し、その結果を教育施策に生かすとか…。学力テスト実施を決めたとき文科相は「子ども・学校を競わせて学力を向上させるのだ」と言っていました。この話の前提となっている、学力が本当に低下しているのか、低下しているとしたらその原因は何なのか、その原因が明らかになってはじめて対応がとられると思うが、そうした検証がちゃんとされていない。

授業時数が10%増加してもいいと思うが、その授業の質が問題。増えても質が良ければ、子どもが勉強に興味を持てるような授業をやってくれさえすれば、おのずと学力は付いてくると思う。ただ時間を増やして、詰め込み教育をされても、自分で考えて行動する子どもが育つのか。

一番目の「『ゆとり教育』を見直し、学力を向上する」ということと、二番目の「学校を再生し、安心して学べる規律ある教室にする」ということは正反対のことを言っているような気がする。矛盾しているのではないか。ゆとり教育を見直して授業時数を増やしたら、いじめが増えますよ。そしてそのいじめに対しては厳しく対処すると。競争原理を教育現場に持ち込んで、子どもたちを締め付けて、いじめや校内暴力が増えたら…。社会全体で「学力とは何か」という学力観が共有されていない。自分でものを考えて、いろんな問題を自分自身の問題としてとらえ、判断していく。その判断にもとづいて生きていく、そのような力を学力ととらえる人は多いと思うが…。

先日の依さんが講演の中で次のように話されていました。……現在の目標規定はどういうものかという、小学校では「自主・自立の精神を養う」、中学校では「公正な判断力を養う」、高校では「社会について広く理解と健全な批判力を養い、個性の確立に努める」……こういう力を学力というのではないかと思う。今のやり方で授業時数を増やしていくだけでは、学力向上にはつながらない。

再生会議の報告の学力向上の項目にサブタイトルとして「塾に頼らなくても学力がつく」と書かれているが、塾に行ってつくような学力が教育再生会議の目指している学力なのか。同じサブタイトルに「教育格差を絶対生じさせない」とあるが、お金のある人だけが塾へ行って学力がつくのでは困るから、塾で身につける学力を公教育でつけさせようということなのか。

とにかく子どもに対して寛容さを失っています

この提言の前提になっている、現在の子どもたちや学校に対する見方というのは、公教育では全く基本的な基礎学力はつかないという認識や、いじめは厳しく対処すればいいんだという認識。今の子どもたちは全く規範意識がない、親を愛したり、国を愛したりする気持ちがないから、「すべての子供に規範を教え、社会人としての基本を徹底する」と言う。こういう子ども観に貫かれている。本当に今の子どもたちはそうなんでしょうか。

確かに、中学校で挨拶はしない、服装も乱れている、先生の話聞いていないし、「なに？この子たちは」「どういう教育をしているのか」と思うことがある。思春期の子どもたち特有の問題と皆がとらえられればいいのですが、こういう問題行動を起こす子どもを排除すればいいという議論も出てくるし、教育再生会議の提言を、全くその通りだと思う親がいてもおかしくない。

今の中学生を見ていると痛々しい。一人ひとりが分断されている。つながりがなくて、つらい状況にあると思う。子どもに限らず大人社会も同じ。佐藤学さんの本の中に、「依存と自立」ということが言われているが、健全な依存が切り捨てられてきた、自立ばかりが促されてきたと思う。現在は依存を許さない社会。でも健全な依存ができる子は自立もできる。健全な依存というのはどういうことか、自分が困ったら人に助けをもらっていい、お互い様だということ。その人と人とのつながりがいい意味での甘え、協力。それが全く切り捨てられてしまっている。それが親子関係にもあるし、友だち関係にもある。依存しあうことができずに、つらい状況の中で自立を余儀なくされる。これは制度的なものも大きく関わっていると思う。皆つらいんだということを見直していかないと。佐藤学さんも言っていますが、大人の子どもに対する集団ヒステリーという感じがすね。「あいつら問題がある」「何とかしろ」「警察に引き渡せ」...それでは問題が解決されない。

子どもは声を上げられないので、いろんな形で問題を出す。自分たちが育ちたいというのを言葉には出せないけれど持っている。学校の先生でさえも余裕を持ってそれを見ることができない。管理されている中では誰も自分の思いをぶつけることはできないし、自分が正しいと思っててもそれを行動に移すことは無理だと思う。先生も生徒も管理されるという方向性を持った施策というのは、どう考えても良くない。

とにかく子どもに対して寛容さを失っています。



皆でいっしょに考えて、親として育てていけたらいい

私たちの世代は、女性が社会進出をして、自己実現をするという教育を受けてきた。だからやらなければならないし、自己実現できなければ悶々とした状態で子育てをしてしまう。子育ての時間を減らして外で働いている人からすると、社会でやっているそのままの女性を母親に移行して、家でも同じようにやってしまうし、自分を犠牲にしてやっ

ていると思いながら子育てをしていると、子育てと自分が調和とれずにうまくいかない状況があると思う。

社会の基本に女性が価値観をあわせていくと、そういうゆがみが出てきてしまう。

だからといって、こんなふうに家庭が変われと国から言われるのは、論外だと思う。

制度的な問題であるにもかかわらず、子どもと親と教師という個に責任を転嫁する方向。うちの学校で「非行防止は家庭から」という文書が各家庭に配られたのですが、温かい家庭とはとか、子育てはまず親の姿勢から、10項目にわたって、ご丁寧に市のこども課からご指導いただいているわけですね！ これ配られて「何？これ」と声をあげた人は少なかったですね。配布された日が、おりしも少年法が改定された日。

中学校での子どもたちの荒れというのはあちこちで聞こえてきます。その荒れを見ている、先生や親たちが、どうやって解決していくかという時に、教育再生会議の出しているような対策を考えていくんだろうなと思う。

でもそういう子たちを警察に突き出しても問題は解決しない。そういうふうに考えられる人がどれだけいるんだろうか。

子どもたちの荒れを目の当たりにした瞬間は、「何とかしろよ」と思ってしまうだろう。でも良く考えるとその背景やいろいろな子どもたちの問題提起が見えてくるかもしれないけれど、その「良く考えて」という時間・場所がない。本来だったら、PTAで「どうしたらいいんでしょうね」と皆で話し合う時間さえあれば、「こういうことを上から押さえつけて、解決しようとしてもだめだよ」という雰囲気が出てくるかもしれないが、そういう場もないのだろうか。

保護者会は先生が連絡事項を言って終わり、全く機能していない。

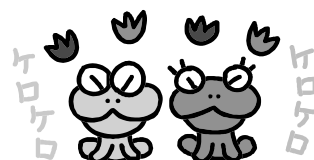
親は授業参観に来ていても、子どもの荒れの状況は見えない。たまたま知りえた子どもの荒れの状況について事実をあげて懇談会で話しても、親の反応はほとんどない。懇談会ではなかなか話し合いにならないので、学校外で先生を交えて茶話会のような場を持ちたいと思ったのですが、うまくいきませんでした。

感情的になって学校にクレームをつける親もいますが、そうした親に対して学校が適切な対応をとれていないことが多い。

親に問題があることも多いし、その親の抱えている問題が子どもに大きく影響しているものもある。問題を抱えている親も、一人で子育てしてきた中で気づけなかったことや不安に思ったことが、それを解消するのに違った方向へ行ってしまう。その親一人の責任ではないから、皆でいっしょに考えて、親として育っていかれたらいいと思うのだけれど...

自分の子どもに問題があるとわかっていても、「うちの子は悪くないです」と自分の弱みを人に見せられないかのようにかたくなになってしまう。

教科の学習をしなくて、子どもたちに話し合いをさせる機会というのを強制的に持たせるという時間をつくれないうだろうか。子どもたち一人ひとりが抱えている状況を出し合っていくことから始めるべき。



先生が問題提起して、子どもたちに話し合いを持たせる。最初はワアワア收拾がつかなくなるかもしれないけれど、子どもたち自身に解決させていくためにはとても時間がかかるもの。でもその時間が持てないのだろうか。時間をかけて、遠回りしながらでも子どもたち自身・親たち自身・先生たち自身が解決していかないといけない。

今 学校で何が起きているかを伝えられるのは、やはり親

子どもを育てるときに「人様に迷惑をかけてはいけない」とよく言いますが、人間って多少なりとも迷惑を掛け合って「お互いさま」といって生きていくものだと思う。あまり迷惑をかけてはいけないと言いすぎると人にかけられた迷惑を許さないという感じになってしまわないか。自分の弱みを人にさらけ出せない、自分の悩んでいることをさらけ出して「助けて」と言えない社会になっているのではないか。

基本的には授業のあり方が大事だと思います。

犬山市では、授業の中で子どもたちの協同学習を進めようとしている。協働学習の中で互いのいいところや力を出しあって、助け合いながら学んでいくということで、子どもたちの本当の力をつけようとしている。目指すべきものはそういう協同学習なのではないか。先生同士も校内研修という形で協同の学びをしていく。親同士もともに学んでいく。一緒にみんなで学ぶということで排他的な関係を乗り越えていけるのではないか。その中で互いの違いを認め合いながら、一緒にできることを探していく。

自分たちの学校の状況がどうなっているのかということを出し合って、そこから深めていけるようなことができるといいですね。具体的なところから出発していかないと、実際の学校の問題とその背景の政治的な動きが結びついていかないのではないか。観念的な話だと、自分が具体的にどうしようかということになかなか結びついていかない。少しでも自分のいる場所で何ができるかということを考えられるように、具体的な問題とからめながら学んでいきたい。今学校で何が起きているかを伝えられるのは、やはり親の方たちです。親の方たちからいろいろな情報発信をしてほしい。